

平成 30 年度研究プロジェクト研究概要報告

研究種別	■自主研究 15	公益目的事業 19
主査名	青木 亮 東京経済大学経営学部教授	
研究テーマ	過疎地交通の新展開と地域コミュニティへのインパクト	
研究の目的： <p>過疎地における交通手段の確保は、少子高齢化と人口減少が進展する中で、以前にも増して深刻な政策課題となりつつある。一方で、公共交通空白地有償運送や貨客混載という新しい方策の法制度上の位置づけが明確になったことで、全国的な展開が見られるようになった。</p> <p>本研究では、こうした過疎地交通の新展開を、地域コミュニティへのインパクトの分析に重点を置きつつ、人口減少が進む近畿地方北部（兵庫県や京都府の日本海側）などで調査する。公共交通空白地有償運送に関しては、社会学の知見をも活用し、住民からなるボランティア・ドライバーの活動や組織化を中心に現地調査を行う予定である。貨客混載に関しては、地元農産物の集荷・出荷や宅配サービスの利便性向上等、公共旅客交通の非利用者に与えるインパクトを調査することで、沿線の地域コミュニティ全般に与える影響について考察したい。近年北欧を中心に話題となっている MaaS(Mobility as a Service)が、わが国の交通サービスに及ぼしうるインパクトについても考察を進める。</p>		
研究の経過（4月～3月）： <p>5月12日（土）に本年度の研究をメインで進めるメンバーと主査で、研究方針や内容について打ち合わせを行い、それをふまえて7月26日（木）に研究会を開催した。研究会では、本年度の研究内容や現地調査について議論すると共に、調査地域である養父市のコミュニティ交通の概略を報告して議論した。またゲスト講師として工業デザイナーの井上晃良氏をお迎えして、ドイツ・カールスルーエの交通政策についてお話しいただいた。そのほか東吾妻町の公共交通について研究会メンバーより報告いただいた。第1回研究会の議論を踏まえ、8月22日～24日に養父市と全但バスを訪問して、自家用車有償運送について現地ヒアリング調査を実施した。第2回研究会（12月6日）では、現地調査の成果および全但バス神鍋線の貨客混載事業について報告を行い、研究を深化させた。また第1回、第2回の研究会の成果をもとに、フォローアップ調査を実施して、第3回研究会(2月26日)で報告すると共に、研究報告書の作成に取り組んだ。この他、研究会では、MaaSにおける企業間連携についての報告、山梨県早川町乗合バスについて報告等があり、議論した。</p>		
研究の成果（自己評価含む）： <p>兵庫県養父市における自家用車有償運送「やぶくる」や全但バス神鍋線の貨客混載輸送の事例研究などを通じて、近年の過疎地交通の現状、ボランティア・ドライバーによる交通サービスや貨客混載輸送の取り組みを明らかにできたと考える。</p>		
今後の課題： <p>一定の研究成果に到達したと考える。これら成果を報告書として取りまとめると共に、理論の一般化や具体的な政策提言に向けて各研究者がさらに研究を深化させていく。</p>		